

内的ワーキングモデルが中学生の学習動機づけに及ぼす影響 —縦断研究より—

The effect of Internal Working Model on the learning motives of junior high school students — The longitudinal study —

大野みな子 (Minako Ohno) 指導：青柳 肇

【問題と目的】 動機づけにおいて、人間関係の重要性が示唆されており（鹿毛，1995；Ryan & Deci, 2000），愛着理論の「安定」は内発的動機づけをサポートし（Ryan & Deci, 2000），動機づけに影響する関係性とは安定愛着に導くような関係性とされている（繁多，2003）。また，愛着における「安定」は「自己価値」を高め、「自立」・「依存」を促進するとされている（Bowlby, 1969, 1973, 1980）。しかし，この推定に関する研究は少ない。そこで本研究は，内的ワーキングモデル（IWM）が中学生の学習動機づけに及ぼす影響を明らかにするため，関係性の仮説モデルを作成し検討する。

研究1

【目的】 学習動機づけ・関係性の諸要因の発達による変化の検討

【方法】 調査期間：1回目：中学1年生時（2009年9月から10月），2回目：中学2年生時（2010年9月から10月）の計2回。対象：1回目・2回目ともに回答した首都圏中学生380名。内容：[学習動機づけ要因]：(1) 学習動機づけ尺度（安藤，2008），[関係性要因]：(2) 内的作業モデル尺度（Barth, 1988）(3) 独立意識尺度（加藤・高木，1980）(4) 友依存尺度：独立意識尺度（加藤・高木，1980）の「親への依存」を参考に作成 (5) 自己価値尺度：児童コンピテンス尺度（桜井，1992）の下位尺度を使用。

【結果と考察】 学習動機づけ・関係性に関する各下位尺度得点を従属変数，学年段階（1年生時・2年生時）を独立変数とする要因分散分析を行った。その結果，2年生時の「安定」「独立」「親依存」「友依存」「自己価値」「高自律」「内発」は1年生時に比べ低下し，2年生時の「アンビバレント」「回避」は1年生時に比べ上昇した。「反抗」「低自律」は差がなかった。2年生時は1年生時に比べ，動機づけが低く不安定であることが明らかになった。さらに中学生時は，IWMの可塑性がある時期であることが示された。

研究2

【目的】 1年生時の諸要因が2年生時の諸要因に及ぼす影響を検討

【方法】 研究1に同じ

【結果と考察】 交差遅延分析を行った。その結果，「安定」は「独立」「自己価値」「友依存」に正の影響がみられ，仮

説を支持する結果となった。「親依存」と「高自律」は，双方向の因果関係がみられ，親に依存することで自ら勉強する「高自律」になることが示唆された。さらに「高自律」は「内発」に影響し，「高自律」が「内発的動機づけ」に変化する可能性が示された。また，「安定」は「自己価値」を高め，「自己価値」は「内発」に影響することが示され，IWMの学習動機づけへの影響が示された。

研究3

【目的】 学習動機づけに影響を及ぼす関係性の仮説モデルの検討

【方法】 研究1・2に同じ

【結果と考察】 多母集団同時解析を行いその結果，測定不変モデルが成立した（GFI=.897, AGFI=.812, CFI=.857, RMSEA=.090）。「IWM」の「安定」が「独立」を媒介しそれが「学習動機づけ」を高めることが明らかになった。また，「自己価値」は構成概念の「学習動機づけ」に影響を及ぼさず，研究2の結果から，「内発」にのみ影響すると考えられる。

【総合考察と今後の課題】

本研究は，内的ワーキングモデルが中学生の学習動機づけに及ぼす影響を明らかにすることであった。IWMの「安定」は「独立」を促進し「学習動機づけ」を高め，さらにIWMの「安定」から影響をうける「自己価値」は「内発」に影響することが示された。中学2年生は学習動機づけ・自己価値の低下が見られ，IWMの可塑性が示された。これにより，中学1年生時において「安定」を高めることで中学2年生時の学習動機づけが高まることが予測される。中学生時のIWMの「安定」をどのように高めるか検討することが今後の課題である。